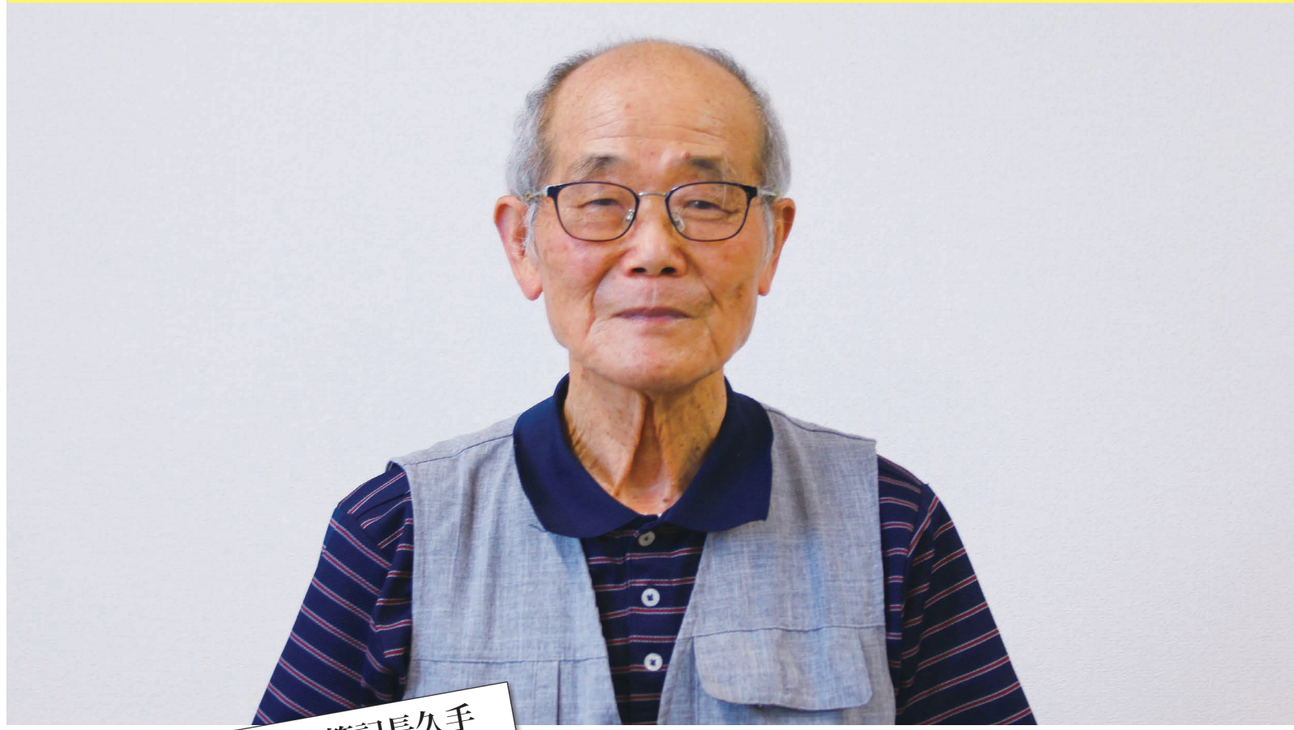
# わたしのまちづくり

「市民主体のまちづくり」と言われてみなさんは何か具体的なイメージがありますか？
ここでは、主体的に活動している市民を情報課職員が取材して紹介します。



要約筆記長久手

代表 福本（ふくもと） 喜一（きいち） さん

**今回は、講演会等内容についての要約筆記の実施や難聴者の支援活動などについて取り組む、要約筆記長久手代表の福本喜一さんにお話を伺いました。**

情報課職員（以下「情」）：今日はよろしくお願いします。早速ですが、要約筆記長久手の活動について教えてください。

福本喜一さん（以下「福本」）：要約筆記長久手は、耳の聞こえにハンディがある人（難聴者）が講演会の内容等が理解できるように、講師の話す内容をその場で要約してスクリーンに表示したり、難聴者の理解啓発等について取り組む市民団体です。本市初の要約筆記活動団体として約8年前に市民数人で立ち上げ、現在は6人で活動しています。

## ノートテイク

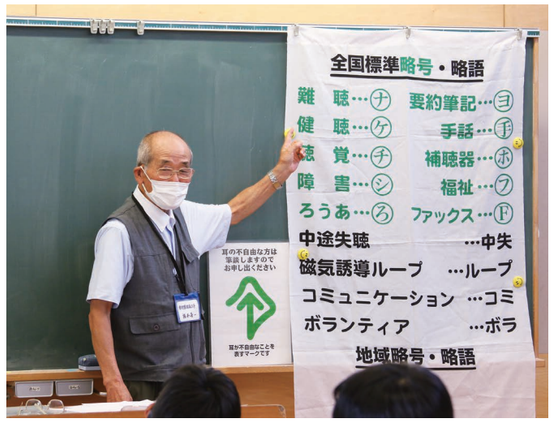
情：本市初の要約筆記活動団体を立ち上げるなんて、とても苦労されたと思いますが、なぜ立ち上げようと思われたのですか。

福本：一言で言うと、私自身がいろんなことに興味があったんです。例えば、新聞に掲載されていたことをやってみたり、地域で面白そうな活動をしている団体があったら参加したりですね。そんな中、多くの人と交流していたのですが、中途難聴者（もともと耳は聞こえていたが、病気や加齢等により聞こえない、または聞こえにくくなった人）が↖多くいたんです。難聴者と接するときは手話というイメージがありますが、実際は生まれつき難聴の人が手話を使うことが多く、中途難聴者は手話が分からない人が多いんです。今後も、高齢化が進み、手話の分からない中途難聴者が増えて、要約筆記がより身近で必要なものになっていくかもしれない、今以上に必要になるのではと感じました。そんな時に、たまたま要約筆記奉仕員養成講座が開催されることを知り、参加したところ、とても面白く、支援する側も手話のように多くのことを覚えなくても難聴者の手助けができるため、私でもできるかもと思ったのがきっかけです。

情：今後も難聴者が増えるかも知れないとのことですが、今後の目標を教えてください。

福本：「ノートテイク」を広げたいですね。ノートテイクとは、相手の言葉が聞き取れなくて困った人がそばにいたら、その場で紙などに相手が言っていることを書いてあげることです。難聴者は車いす利用者のようにぱっと見ただけでは分かりにくく、本人も難聴であることを隠すことが多いのですが、そうした人が気軽に助けてもらえるよう、ノートテイクの担い手を増やすとともに、難聴についても広く知ってもらい、本人が隠す必要がないような共生社会にしたいですね。その一環として、要約筆記長久手では、小・中学校で福祉実践教室を行っています。そこでは、小・中学生が要約筆記を体験するとともに、難聴者本人が難聴について説明しています。参加した子ども達からは、「近所に住む耳の悪いおじいさんやおばあさんが道で困っていたら助けようと思います」等嬉しい感想をいただいています。

＼＼ 小学校での福祉実践教室 ／／




## 興味を持つ

情：それでは、最後に市民のみなさんにメッセージをお願いします。

福本：私はいろんなことに興味があり、その中の1つである要約筆記を始めたところ、とても面白かったので現在も続けています。なので、みなさんには、ぜひいろんなことに興味を持って欲しいですね。そして、できたら何か始めてほしいです。例え三日坊主でもいいから、何か始める、それが面白くなかったらまた別のことを始めてみたり、別のことに興味を持つ、それらをくり返す中で、自分にとって、何か面白いものが見つかれば、それを続けられるんじゃないかなと思います。それが、もしかしたら人とのつながり、まちづくりにつながるかもしれません。そのためにも、まずは何かに興味を持って欲しいですね。

**12月3日（金）～9日（木）は障害者週間です。**

問 福祉課 ☎56-0614

詳細は市HPへ →

「Weeklyながくて」でも要約筆記長久手の活動の様子を取材しています。

Weeklyながくてはこちら →